

**主 題：重荷を負い合う神の家族②****聖書箇所：ガラテヤ人への手紙 6章1節****テーマ：兄弟姉妹の罪に対してどのように私たちは応答すべきなのか？**

先週から私たちは、重荷を負い合う神の家族について、さらに言えば、神の家族—兄弟姉妹の間に起る罪にどのように応答するのかについて、ガラテヤ6：1-5を中心に学び始めました。その続きをきょうも考えてみます。前回学んだことを思い出ししながら、1節から神様のことばによく耳を傾けてください。

**ガラテヤ6：1**

「：1 兄弟たちよ。もしだれかがあやまちに陥ったなら、御霊の人であるあなたがたは、柔和な心でその人を正してあげなさい。また、自分自身も誘惑に陥らないように気をつけなさい。：2 互いの重荷を負い合い、そのようにしてキリストの律法を全うしなさい。：3 だれでも、りっぱでもない自分を何かりっぱでもあるかのように思うなら、自分を欺いているのです。：4 おのおの自分の行いをよく調べてみなさい。そうすれば、誇れると思ったことも、ただ自分だけの誇りで、ほかの人に対して誇れることではないでしょう。：5 人にはおのおの、負うべき自分自身の重荷があるのです。」

さて、先週学んだ内容を思い出せたでしょうか？私たちは今、罪の問題、特に兄弟姉妹の罪に対して聖書的に解決する方法を考えていました。キリストを信じて救われたからと言って、争いや問題がすべてなくなってしまうわけではありません。私たちがみな、未だに罪の性質を持っているからこそ、私たちは残念ながら互いの間で罪を犯し、罪によって痛みを覚え、関係に難しさを覚えてしまうことがあります。罪は現実の問題として存在しています。だからこそ、神の家族—兄弟姉妹の間を騒がすような出来事が生じたとき、果たしてどのようにして私たちひとりひとりがそれに応答すべきなのかを、みことばから正しく知っていることが欠かせなかったのです。そして、前回から私たちは、具体的に罪に対して取るべき正しい応答の10個の要素をパウロのことばから見始めました。すでに三つの要素を見ましたが、覚えていますか？

**○兄弟姉妹の罪に対する正しい応答：10個の要素****1. 同じ神の家族に属する者であると覚えること 1a節**

一つ目の応答は、同じ家族に属する者であると覚えることでした。6節はこう始まっていました。「兄弟たちよ。」と。私たちが罪を犯している兄弟姉妹を目にするとき、私たちはその人たちから距離を取ったり、冷たく接したりするものではありませんでした。その人が、自分と同じ神様によって救われ、同じ神様によって変えられ、同じ神様を愛する家族の一員なのだともまず心に留めること、それが私たちにとって大切でした。

**2. あわれみをもって罪を取り扱うこと 1b節**

二つ目の応答として見たものは、あわれみをもって罪を取り扱うことでした。1節はこう続けました。「もしだれかがあやまちに陥ったなら、」と。私たちは、愛する神の家族のだれかがあやまちに陥ったのなら、正しい道を踏み外してしまったのなら、心の中で非難するものではありませんでした。罪の恐ろしさを自分も知っているからこそ、その罪に陥る危険性を自分も持っていることをわかっているからこそ、私たちは互いにあわれみを示して、どんな罪であろうとそれに苦しむ者を進んで助けてあげようとするのです。

**3. 御霊に満たされて兄弟に向き合うこと 1c節**

三つ目に見た応答は、御霊に満たされて兄弟に向き合うことでした。続きにこう書いていました。

「御霊の人であるあなたがたは」と。もしだれかが過ちに陥ったとき、その人をケアする責任はだれにありましたか？それは一部の限られた人たち、教会のリーダーだけに託されていたものではありませんでした。もし恵みによって救われて、キリスト・イエスに対する信仰によって造り変えられているのなら、もし御霊によって今を生き、御霊によって導かれている信仰者であるのなら、罪に陥った兄弟姉妹と向き合って、その者の必要とする助けを与えてあげることは、ひとりひとりに神様から託された責任、務めだったのです。三つ見ましたが、どの応答も私たちの日々の歩みにおいて、とても欠かせないものでした。でもこれですべてではありません。パウロは罪に対して取るべき正しい応答をさらに加えて教えてくれていました。きょうは四つ目と五つ目の要素、特に四つ目をよく考えてみます。ぜひそれを自分自身のこととして続けて一緒に考えてみましょう。

#### 4. 正しい状態への回復を追い求めること 1d節

罪に対する応答の四つ目の要素は、「正しい状態への回復を追い求めること」です。道を踏み外し、あやまちに陥っている兄弟姉妹を目にするなら、私たちは、そのような者を正しい道へと、元の状態へと戻してあげようとするのです。もう一度をみことばを見ると、1節の鍵となることばが途中に出てきていました。こう書いています。「兄弟たちよ。もしだれかがあやまちに陥ったなら、御霊の人であるあなたがたは、柔和な心でその人を正してあげなさい。」「正してあげなさい。」とはっきりとした命令が記されていました。これまで一緒にみことばを見てきているので、もう気づいた人もいるかもしれません。ここでパウロは、この動詞に“継続を表す現在形”を用いていました。ということは、どういうことかということ、パウロは、もしだれかがあやまちに陥ったのであれば、一回だけその人を正してあげなさいと求めていたのではなかった、ということです。気が向いた時だけいつかそれをなしてあげなさい、と命じていたのでもありません。そうではなく、パウロは、正しい道から逸れたような者を、兄弟姉妹が継続して正してあげるように、と求めていました。要するに、神の家族にとって罪を正すということは生活の一部、歩みにとって欠かせないものだ、というわけです。

でも皆さん、そもそもこの「正してあげなさい」というのは、いったい何をなすことなのでしょう？具体的に何が求められているのでしょうか？罪に陥った者をただ厳しく戒めることというのでしょうか？あやまちを犯した者に向かって、「あなたはここが間違っていますよ」と単に指をさして責めることを言うのでしょうか？もしかすると、「正してあげなさい」ということばを耳にすると、こういった厳しい、きつい印象をすぐ頭に思い浮かべる人がいるかもしれません。でもこの箇所では用いられていたことばは、実はそのようなものではありませんでした。

##### ▶「正してあげなさい」

ここで覚えていてほしいのは、この「正してあげなさい」という動詞には、もともと「元の良い状態に戻す」とか「バラバラになったものを整える、直す」という意味が含まれているということです。そしてここから、例えば「何かを修理する」「修繕する」といった意味で使われていたりもしました。一つのギリシャ語の辞典もこのように定義しています。「(正してあげなさい)は、特に骨や関節を固定する手術用語として使用されます。またほかの文脈では、疲弊した人々を強めたり支えること、船乗りが船を整備すること、漁師が網を修理すること、政治家が派閥争いを沈め、団結を取り戻すことを指すのにも用いられたりもします。」(ギリシャ語辞典)イメージできますか？もう少しだけみことばを見ればそのイメージが膨らむかと思いますが、例えばこのことばというのは、舟で網を修理していたヤコブとヨハネの姿を表すのに用いられたりしていました。マタイ4:21にこんなふうに書いています。「そこからなお行かれると、イエスは、別のふたりの兄弟、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネが、父ゼベダイといっしょに舟の中で網を繕っているのをご覧になり、ふたりをお呼びになった。」と。ここに「繕っている」ということばが出ました。それが「正してあげなさい」ということばと同じことばになるのです。当たり前前に聞こえるかもしれませんが、どうして漁師は網を繕うのでしょうか？網を直すのでしょうか？それは、魚

を捕まえるのにもし網が破れたままであったら、それほど愚かなことはないからです。網が破れたままでは役に立たないからです。壊れた状態のままでは本来の目的のために使用できないから、それを修理しようとするのです。またこれだけではありません。もう少し加えてこのことばを考えると、このことばは旧約をギリシャ語に訳した七十人訳聖書の中で使われています。その中でも壊れた城の城壁を直す姿に使われていました。エズラ4：12にこんなふうに記されています。「王にお知らせいたします。あなたのところから、こちらに来たユダヤ人たちはエルサレムに行き、あの反抗的で危険な町を再建しています。その城壁を修復し、その礎もすでに据えられています。」ここで「修復し」ということばが出てきましたが、これが「正してあげなさい」と同じことばになるのです。でもこれも同じですね。もし城壁が崩れたままであればどうなります？町を守ることは当然できません。だから人々は壊れた状態をそのまま放っておくのではなく、それを一生懸命に元の良い状態へと戻そうとしていたのです。

そうすると、この「正してあげなさい」という命令の焦点は、どこにあるでしょうか？単に兄弟姉妹を厳しく懲らしめることではなく、必要な助けを与えてあげることにありました。罪に陥り、神様に喜ばれる道から外れてしまっている者がいるなら、見て見ぬふりをするのではありません。ただ「間違っている」とだけ指摘して、その場を立ち去っていくのでもありません。その者を同じ家族の一員としてあわれみ、そして再び正しい元の状態へと回復できるように、あやまちを修正してあげようとするのです。そしてそれゆえに「正す」ということは罰ではなく、問題を抱えて苦しむ兄弟姉妹への愛の表れになるのです。このことばに関して、ウィリアム・バークレー先生もこんな説明をしていました。「このことばの総括的な内容は、懲らしめではなく、癒しに強調が置かれています。正すことは罰ではなく、修正することと考えられているのです。またパウロは、さらにことばを進め、私たちが過ちや罪に陥っている人を見るときは、『神の恵みが与えられていなかったなら、私もそれに陥っていたであろう』と口にするのが相応しい、と述べているのです。」と。

少し考えてみてください。例えばもし自分の家族とお出かけをしているような時、その中のだれかが目の前で転んで怪我をするのを見たら、私たちはどうするでしょうか？痛がっているのを横目にそのままそこを離れていこうとしますか？痛みを苦しんでいるから懸命に祈らないといけない、と心の中で祈りつつ、やっぱり何もせずに自分の買い物続けようとするのでしょうか？そんなことは絶対にしないでしよう。私たちは転んだ家族の手をすぐに取りろうとするでしょう。手や足を怪我しているなら、寄り添ってその手当てをしようとするでしょう。

皆さん、みことばはこれと同じことを神の家族の間にも求めているということです。信仰のレースを歩んでいる者たちがつまずくなら、そこを見て見ぬふりをして通り過ぎていくのではなく、立ち止まってその者の手当てをなそうとするのです。果たしてこんな態度を私たちは普段、ほかの兄弟姉妹に対して示しているのでしょうか？例えば皆さん、だれかがあやまちに陥った時、私たちは、その者が必要な助けを与えようとするのでしょうか？それともその人が必要としている助けに気づいていながら、ただ見て見ぬふりをして通り過ぎていないのでしょうか？間違っただけではありません。祈ることも必要です。でも、いつもただ祈るだけで、罪を犯し正しい道から外れている者を目にしているにもかかわらず、実際の助けを差し出そうとしないなどということはないのでしょうか？皆さんも同じように転ぶ危険性を持っています。でも転んだ兄弟姉妹を見て、「はあ、なんておかしなことだ」と呆れて、自分のことで今は忙しいからと、立ち止まってあわれみを示すことを拒んでいたりはいませんか？皆さん、私たちはみな弱さと葛藤を覚えています。残念ながら私たちはみな罪に陥ってしまうことがあります。だからこそ、神の家族にとって、正しい状態へと回復を求めて正し合うことは、歩みにとって決して欠かせない生活の一部だったのです。

でも、ある人は言うかもしれません。「その必要性はよく分かります。ただどのようにして、その罪やあやまちに陥っている兄弟姉妹を正してあげればいいのかよく分かりません。」と。もちろん、みこ

とばはその手順においても明白に私たちに教えてくれていました。イエス様ご自身がはっきりと言われていました。マタイ18：15は何回も見ていますが、もう一度よく考えてみましょう。「また、もし、あなたの兄弟が罪を犯したなら、行って、ふたりだけのところで責めなさい。もし聞き入れたら、あなたは兄弟を得たのです。」罪を犯した兄弟姉妹がいるのなら、何をすることが求められていたでしょう？ほかのだれかではありません。その罪に気づいた者がその兄弟姉妹ところに行って、罪を個人的に知らせるのです。注意してほしいのは、ここでイエス様は、あなたの兄弟があなたの好みに反したからとか、あなたの基準に反したから、その時に行って伝えなさい、とは言われませんでした。兄弟姉妹を正すのは、何も私たちが望む姿にその人が変わるためではありません。私たちは相手のことばや態度が神様の基準から外れていることを示して、そしてその罪から悔い改めて神様のもとへと立ち返ることができるようにと、愛を持って助けてあげようとするのです。もしかすれば、私たちがみことばから罪を示そうとする時、本人はその罪に全く気づいていないような場面すら多くあったりするでしょう。でもそんなときでさえ、私たちはへりくだった心をもって告げてあげるのです。「兄弟、もしかしたら自分の勘違いかもしれません。間違いだったら遠慮なく教えてください。ただ、あなたの歩みを見たとき、その歩みにみことばから外れている部分があることに、私は気づきました。愛するあなたに、神様を悲しませるようなことはしてほしくありません。だからこの部分に関して、あなたが何を考えているのか、あなたがどのように見ているのかを教えてください。」と。こうして私たちは、互いの霊的成長を助けようとするのです。救われたすべての者に、神様が、キリストに似た者へと変わり続けていくことを求めておられるからこそ、同じ家族にある者として、日々、罪を正してあげようとするのです。そしてこれこそ、本来あるべき神の家族—教会の姿でした。時にそれは厳しい警告や戒めを伴うものであったとしても、私たちは互いの歩みを思い合っているからこそ、あやまちに陥っている者にみずから手を差し伸べようとします。神様のことを心から愛しているからこそ、神様の愛されているものを自分自身が愛するだけではなくて、ほかの兄弟も神様の愛されているものを愛するようにと、互いに道を外れないようにと、助け合うのです。箴言27：6に「憎む者が口づけしてもてなすよりは、愛する者が傷つけるほうが真実である。」と。神様と兄弟姉妹に対する愛、それがすべての基盤でした。

そして、その愛がすべての基盤にあるからこそ、もしその人が悔い改めることを願って兄弟姉妹のところに行って、みことばから罪が明らかにもかかわらず、かたくなにそれを認めないのなら、かたくなにそれを悔い改めるのを拒むのなら、あきらめるものではありません。私たちはその者を愛するからこそ、次に、ひとりかふたりの証人をそこに連れて行こうとするのです。先の続きにこう書いていました。マタイ18：16にこう続いています。「もし聞き入れないなら、ほかにひとりかふたりをいっしょに連れて行きなさい。ふたりか三人の証人の口によって、すべての事実が確認されるためです。」なぜ、私たちは複数の証人を連れて行こうとするのでしょうか？もちろん、罪に陥っている者をよってたかって責め立てるためではありません。一対一で伝えた内容が本当なのかどうかを、複数の目で事実を確認するためでした。取り上げられているその罪が、実際に起こっていることなのか、ただの勘違いなのか、みことばの基準から外れていることが本当に起こっているのかどうかを、ひとりだけではありません。複数の者でもきちんと確認をして、それが事実であれば、悔い改めるようにと、続けて忍耐を持って求め続けるのです。「兄弟、あなたは認めようとしなくても、私だけではありません、私たちは神様を大いに悲しませる罪を、あなたのうちに見ています。今のあなたがしていることは、愛する神様に逆らっています。だからどうか、その歩みを悔い改めてください。素直に罪を認めて、主に赦しを求めて、立ち返ってください。」と。こうして個人が行くだけではありません。数人の者があやまちに落ちる兄弟姉妹に愛をもって、熱心に熱心に、何度も何度も訴えるのです。罪に落ちているのではなくて神様のもとへ戻ってきて、罪から離れて神様のもとへと帰るようにと。そのように手を差し伸べ続けるのです。

それでも悲しいことに、その兄弟がかたくなに聞き入れなかったら、どうしたらいいのでしょうか？みことばによって罪がはっきりと示され、複数の人たちが訴え続けてなお耳を傾けずに悔い改めなければ、どうするのでしょうか？そのときは、もう仕方ないと言って諦めるのでしょうか？そうではありません。イエス様はこう言われていました。18：17節の前半部分にこう書いていました。「**それでもなお言うことを聞き入れようとしないなら、教会に告げなさい。**」私たちは諦めるのではなく、その人の罪を教会に、言い換えれば神の家族全体に告げるというわけです。ある人たちはこの対応に居心地の悪さを抱くことがあります。みなの前で罪に陥っている者の名前や罪の内容を告げるということに、抵抗を覚える人もいます。このような対応こそ愛の欠けたひどい行為だ、と非難する人たちもいたりします。でもここまで聞いてきた皆さんなら気づくでしょう。この行為こそ、私たちがその人に示すことのできる最高の愛でしかありません。罪に陥っている兄弟姉妹を辱めるためではありません。その者の霊的な状態を何よりも気にかけているからこそ、ひとりで行くわけではありません。2、3人だけで行くわけでもありません。神の家族の全員が、その者を罪から助け出そうとするわけです。全員が、あやまちに落ちるその者のために熱心に祈って、その者が悔い改めて神様に立ち返るようにと働きかけ続けるのです。少し想像してみてください。もし、愛するだれかが崖へと繋がる道を一直線に突き進んでいるのを見たなら、私たちはどうするのでしょうか？そのまま見て見ぬふりをするのでしょうか？崖から落ちなければいいなあと心の中でつぶやいて放っておくのでしょうか？そんなことは絶対にしないでしょ。たったひとりでも行って、その人の腕を掴んで止めようとするでしょうし、それでも止まらなければ、今度は複数人を呼んで来て一緒に止めようとするでしょうし、それでも一向に止まらなければ、もっと多くの人たちを集めて何とか引き止めようとするでしょう。「そっちは崖です！だから今すぐ止まってください。どうか引き返してください。」と、その人に対する深い心配と愛のゆえに、何度も求め続けるでしょう。それと同じように、神の家族は道から逸れている者を、神様に逆らい続けていることをよしとはせず、神様のもとに立ち返るようにと愛する兄弟姉妹に訴え続けるのです。

でも、もしそれでもその兄弟が悔い改めず、教会が求め続けても一向に耳を傾けようとしないなら、どうするのでしょうか？イエス様は最後にこのように言われていました。マタイ18：17の後半にこう書いています。「**教会の言うことさえも聞こうとしないなら、彼を異邦人が取税人のように扱いなさい。**」と。罪をみずから追い求めて、かたくなに悔い改めないなら、その者は教会から出され、家族の交わりからも断ち切られるというわけです。どうしてか？それは、いくらその人が「自分は救われている」と口にしていても、その生き方が、未信者と同じようにふるまっているからでした。だから、そのように生きている者を、そのように扱うのです。そして多くの人たちは、これを厳しいと思ったりもします。ただ改めてよく考えてみてください。自分が救われていると思っていても、その生き方のすべてがそれとは真逆のことをしているような者に対して、私たちができる最も愛のない行為は何でしょう？神様が未信者の姿だと表しているその姿を熱心に追い求めているような者に対して、私たちができる最も愛のない行為は何でしょう？それは、その状態でも一切問題ないかのように見て見ぬふりをするということです。大丈夫な状態にない人に対して、大丈夫だと思わせることです。もちろん、私たちはだれも人の心の内を知ることはできません。だから私たちは自分勝手にさばくことはしません。でも、同時にみことばがはっきりと述べていました。例えばIヨハネ3：6、9に「:6 **だれでもキリストのうちにとどまる者は、罪を犯しません。罪を犯す者はだれも、キリストを見てもないし、知ってもいないのです。**」

「**だれでも神から生まれた者は、罪を犯しません。なぜなら、神の種がその人のうちにとどまっているからです。その人は神から生まれたので、罪を犯すことができないのです。**」と書かれています。ただ勘違いしてほしくないのは、ここでヨハネはなにも「**信仰者は罪を一切犯さない**」と言わんとしていたわけではありません。この箇所での「**罪を犯しません**」とか「**罪を犯すことができないのです**」ということばには、どれにも最初に見たのと同じ“**継続を表す現在形**”が使われていました。要するにヨハネが言いたかったこ

と、それは、キリストのうちにとどまっている者、神様によって本当に救われている者は、継続的に罪を犯し続けることは絶対にできない、ということです。神様が忌みきらわれる罪を知っていながら、いつまでも悔い改めようともせずに、救われる前のように、みずからの意志で、神様が忌みきらっておられることを犯し続けることは、真の信仰者には絶対にありえないということです。だからはっきりと言われていました。「罪を犯し続ける者はだれもキリストを見てもいません。最初から知ってもいません。」と。だからこそ、未信者のように神様に逆らい、教会のかしらであるキリストをみずから拒み続けているような者との交わりを、教会は断ち切ろうとするのです。でも皆さん、これも同じです。神の家族はかたくなに罪を犯すその者に対して呆れ果てて、失意やあきらめの心からこれをなそうとしているのではありません。たとえどんなに悲しくて辛いことであったとしても、悔い改めを拒み続ける者が、罪の深刻さに気づいて神様に立ち返ることを願うからこそ、その者との交わりを断とうとするわけです。私たちが罪を妥協しないからこそ、その人の心からの悔い改めを祈るからこそ、私たちは罪に陥った者が正しい状態へと回復することができる、神様が私たちに与えて下さった最大の手段を用いようとするのです。だからこそ皆さん、これが、神の家族が互いの間で示すことのできる本当の愛でした。もっと言うなら、これこそが、私たちが神様から受けた愛でした。

改めて思いませんか？人間的に考えれば、今見た「罪を正す」ということは、あまりにも厳しく難しく感じるものかもしれません。多くの犠牲を伴うのです。あやまちに陥っている者が罪に気づかずにかたくなであり続ければ、忍耐や寛容さというものが大いに問われることとなります。いつまでも諦めずに愛を示し続けることなど、不可能に思えるかもしれません。でも、そんな時こそ、私たちは忘れてはいけません。私たちがかたくなに逆らい続けて罪の中を歩み続けていたその時、あわれみを示し、御手を差し伸べてくださったのは、神様でした。私たちが自分の罪深さに気づかず、神様を愛そうともしなかったその時、ご自分のひとり子であるイエス様をこの世に送って愛を示してくださったのは、神様でした。罪に汚れた私たちに値したのは、ただ神様の御怒りでしかありませんでした。しかしその御怒りを押しとどめ、忍耐や寛容を示し、キリストを信じるすべての者に救いを与えてくださったのは、神様でした。だからもし、この神様の愛を知らないと言うなら、そんなあなたに今私たちが見てきたことを実践することはできません。だから、まずこの神様の愛を知ってください。ご自分の大きな愛のゆえに、私やあなたの罪のために十字架にかかってくださった救い主キリストを自分の救い主として主として本当に信じて、きょうからこの方のために歩んでください。そしてこの方の愛を知っているなら、私たちは互いに罪を正し合うことができます。私たちの力ではないからです。同じ神の家族としてこの愛を実践していくことができます。それは私たちが同じ愛を受けたからです。互いの成長を助け、あやまちに陥るのであれば、正しい状態へと回復することを追い求め続けること、それが、兄弟姉妹が罪に陥ったときにとるべき四つ目の正しい応答でした。

## 5. 柔和な心をいつも働かせること 1 ● 節

また続けてもう一つだけ。罪に対する正しい応答の五つ目の要素、それは「柔和な心をいつも働かせること」です。あやまちに陥っている兄弟姉妹を目にすれば、私たちはその者を元の状態へと互いに正し合おうとします。でもこのとき、私たちがどんな態度であろうと何の問題もない、というわけではありません。御霊の人である私たちは、その相手に対して、「柔和さ」というものを示すことが欠かせない、というわけです。ガラテヤ6章にこう続いていました。「兄弟たちよ。もしだれかがあやまちに陥ったなら、御霊の人であるあなたがたは、柔和な心でその人を正してあげなさい。」と。「柔和な心」とは、どのようなものなのでしょう？少し前の箇所を目をやると、5：23でパウロは、御霊の実の一つとしても「柔和」を挙げていました。でもこの「柔和」とは、具体的にどんな態度のことを指すのでしょうか？もともこのことばには、「上手に、うまく制御された力」を表す意味合いが含まれているのです。それがこのことばを理解するうえでの鍵になります。ひとりの註解者はこのような説明をしていました。よく

見てください。「(柔和)はギリシャの一般的な書物では、心地良い風、治療薬、訓練された子馬を描写するのに用いられました。いずれの場合も、風は嵐になり得る力を、薬は効きすぎれば死に至らせる力を、馬は暴れることのできる力を持ち合わせています。したがって、柔和とは制御された力のことを表すのです。」言われていることがわかりますか？出てきていた風にしろ、薬や馬にしろ、それらは確かにほかの何かを容易に傷つけるだけの力をうちに秘めていますね。風が暴れ出せば嵐になり得る力を持っています。薬も効きすぎると死に至らせる、もっと重い病気に至らせるそんな力を持っています。馬も暴れれば手に負えない、騎手を傷つけるそんな力を持っているのです。でも同時にその力がきちんとコントロールさえされていれば、ほかに良い影響や効果をもたらすことに繋がるというわけです。そしてこれと同じように柔和な者というのは、自分のうちに相手を傷つける力を持っていると、正しく理解しているからこそ、慎重になって、痛みではなく良いものを優しくもたらそうとします。皆さん、私たちはこれを自分のこととして、もうすでに知っています。と言うのも、もし私たちがだれかのあやまちを正そうとすると、よく気をつけておかないと容易に相手を傷つけることがあります。例えば、相手への不満などに支配されたままことばを発していれば、どんなことになるか？その冷たいことばが、ただ相手を引き裂くだけになることがあります。相手に対する憤りや、苦い思いに支配されたままでふるまっていればどうなるか？その怒りの態度というものが、相手をただ打ちのめすことに繋がる可能性があります。私たちが御霊とともに歩まず、感情や思いのままにさせてしまうなら、私たちは同じ神様の家族に対して、とてつもない大きな傷を負わせてしまう可能性と力を持っているということです。だからといって、だれかをいっさい傷つけないようにするために真理を妥協して、罪あやまちを全く戒めようとはしないという、そんな話ではありません。罪に陥っている者に真理を話せば、その人にとってそれが傷つくことに繋がることはあるでしょうし、それでも時に、私たちは愛をもってそれをなそうとします。その者が正しく回復することができるように、私たちはすべてのことをなそうとします。最初に読んだ箴言27:6にも書いていました。「**憎む者が口づけしてもてなすよりは、愛する者が傷つけるほうが真実である。**」と。ですから、真理を語って傷を与えるときもあります。でも同時に、そのようにして真理を語ることでさえ、私たちは細心の注意を払って、必要以上の痛みや苦しみを与えないようにふるまおうとします。間違っても罪に落ちたその者の弱さや愚かさをさばこうとするものではありません。自分勝手な感情や思いをぶつけるものではありません。正しい道から逸れてしまった者を、そこからどうにか助け上げたいとするその愛のゆえに、私たちは優しさと、そして必要な厳しさをもって互いに正し合おうとします。ポール・トリップ先生もこんなことばを残していました。「兄弟や姉妹が罪に陥っているのを見ると、私たちの自然な応答は柔和であるべきです。神の恵みがなければ、自分も彼らと同じ場所にいることを覚えていなければいけません。それゆえに、私たちは自分が受けたのと同じ恵みをもって、彼らに応答すべきなのです。神は愛を受けるに相応しくない時に愛してくださいました。繰り返される罪を前にしても、赦してくださいました。実際、私たちを暗闇から驚くべき光へと導きだしてくださるのは、神の愛です。私たち皆が残された罪の現実と戦う中、お互いにコミュニケーションをとる際には、キリストの切実な愛を反映することが極めて重要なのです。」(ポール・トリップ)自分自身の歩みを振り返ってみてください。そうすると、どうです？例えば兄弟姉妹が罪に陥るのを見るようなとき、果たして私たちは、柔和な心でその相手に接しようとしているでしょうか？自分自身が相手を容易に傷つける力を持っているということを覚えているでしょうか？そして覚えているからこそ、神様の助けを祈り求めながら、忍耐や親切さを喜んで示そうとしているでしょうか？それとも、御霊によって歩もうとせず、自分の感情や考えに支配され、思いのままにふるまっていないでしょうか？罪を犯し、自分を傷つけたような者であれば、自分も同じように傷つけても構わないと、あわれみを示すのを拒んで、そして、ことばや態度で怒りや不満をあらわにしていないでしょうか？

もしそうだとすると、私たちは忘れてはいけません。皆さん、私たちが今、罪やあやまちに陥っていないのは、ただ神様の恵みのゆえだということです。私たちが何かすぐれているからではありません。私たちがほかの人に比べてまさっているからではありません。ただ値しない私たちに豊かに注いでくださっている神様のあわれみのゆえです。私たちの神様は、まだ私たちが神様に逆らう罪人である時に、キリストを通してご自身の愛を明らかにしてくださいました。思いませんか？神様こそ、私たちを一瞬にして滅ぼす力を持っておられるお方です。でもそのお方が、それでもかたくなに罪を重ね、今でも罪に陥ってしまうそんな私たちに忍耐を示し続けてくださっているのであれば、寛容を示し続けてくださっているのであれば、私たちが寛容を示せませんという言い訳は、絶対にできないということです。どうでしょう？このような神様の柔和な姿を私たちが覚えるなら、姿を覚えるだけではなく、自分自身が神様の柔和さを受けているなら、私たちにとれるふさわしい応答はいったい何でしょう？もし、兄弟姉妹が罪に陥ったなら、柔和な心をいつも働かせてそれを正してあげようとする、その者を元の状態へと回復させてあげようとする、それが私たちにとれる五つ目の応答でした。

こうして私たちがみことばを見る時にわかるのは、この生き方ができるのは、私たちが神様の愛を、神様の柔和を知っているからです。それを知っている者たちが互いの間でも同じようにそれを実践し、同じ神様を愛する家族として生きていこうとします。ですから、もし私たちが神様の姿を忘れていたら、みことばからそれを思い出すことです。もし忘れている人がいるのなら、みことばから思い出させ合い続けることです。そのようにして一致をもって神様のすばらしさを表す、そんな群れとしてともに歩いていきましょう。